牛浜ものがたり

立川愛雄

多摩郡福生郷（市）の、福生・熊川両村にまたがる、〝牛浜〟とは、江戸道（五日市街道）筋に沿った集落で中ほどで〝青梅街道〟と交差しております。東へ進んで〝地蔵坂〟下には「右　江戸　左　きよ戸」（清瀬市）と刻まれた〝道しるべ石〟があるように、清戸道との三叉路となっています。清戸とは、戦国時代には重要な地点であって、北条氏照の〝滝ノ城〟と、〝滝山城〟とを結んだ要衝の地ではなかったのではないでしょうか。

遠い昔のことはさだかではありませんが、江戸末期の安政六年（一八五九）頃の『牛浜出水図絵巻』によりますと、集落の家並みは農家だけではなく、商人や職人の家も混住していたことがわかります。

農家一四軒、商家八軒、職人二軒、借家二軒、空家その他で計二八軒あり、その外、馬立場、地蔵堂、小祠などみえ、この外にも隣接した家々もあったことでしょう。

商家としては、製造（油・豆腐）・食べ物業（二八そば二軒など）、雑貨商、旅籠らしきものがみえます。足袋屋、下駄屋、建具屋の外、絵図の作者である〝寺子屋師匠〟の住居もありました。

『牛浜出水図』とは、安政六年七月、長期にわたる豪雨で多摩川の大洪水はいうまでもなく、この地方特有の武蔵野台地ハケ下からの異常な湧き水によって、大水害を被りました。その惨状を後世に伝えようと、村の寺子屋師匠・藤雲嶺が、当時の有様をつぶさに描いたもので、全巻彩色をほどこした写実的な描写は、当時の風俗や民生を巧みに現わしており、大変貴重な記録であります。

その史料的価値が高いことから、昭和五一年六月二九日、「福生市有形文化財」に指定保存することになりました。所蔵者は、福生市熊川九八七、渡辺治衛家です。

牛浜の地名について

文化一二年（一八一五）刊、斎藤鶴磯『武蔵野話』に

次のような、『太平記』の物語よりの説があります。

「武蔵国に〝石浜〟といえる地名二箇所あり、『太平記』武蔵野合戦の章に「籠手差原より石浜まで坂東道四十六里を片時（一時間ほど）が間に追付たり」とあるは、多麻郡に牛浜といえる地あり、是なるべし。籠手差原は入間郡北野村誓詞が橋（埼玉県所沢市）の辺より、堀兼、入間川までなれば里数よく当れり、同章に「石浜を渡りて河の向の岸高うして屏風を立てたるがごとくなるに」とあれば、是、多麻川の辺にして川の向いは二宮といえる地にして、断岸高く実に屏風を立たるごとくなれば今いう牛浜なることあきらかなり。又、同書、鎌倉合戦の章に「南　遠江守は、今日の合戦に打洩らされた左馬頭を具足し奉りて石浜を指して落ちられける」とあるも、此の池なり。

いつの頃よりか、石浜を牛浜と訛りしや。牛浜は原なりしが、御入国（徳川氏）の後、福生村、熊川村の農民此の地を開発して住居する事となりぬ。ゆえに、北の側を福生の牛浜、南の側を熊川の牛浜といえり。又、豊島郡の石浜は千葉次郎胤利の居城ありて、その地に禅寺あり、総泉寺という。その境内に次郎惟胤の墳墓ありて、是を千葉塚という。又、福島常陸次郎頼季も居城せしと。然れば、この石浜は江戸の北、はしば末崎の辺（荒川区）なるべし。『鎌倉大双紙』にのする石浜もこの地なり。二所の石浜あれば混ずべからず。坂東道四十六里とあれど、本道四里半もあるべし。」（引用文の（　）内は筆者が付す。以下同。）

以上の通り全文を記述致しましたが、武蔵野合戦とは正平七年（一三五二）閏二月二〇日、足利尊氏が新田義貞の遺児義興・義宗兄弟、脇屋義治の連合軍と、武蔵の小手指原（金井原・人見原）で合戦し、敗走して石浜に逃れたという物語りによるものですが、史実の上からは諸説があるが、両牛浜の誕生説をとりあげてみました。

牛浜の語源については定説はありません。〝牛〟のつく地名は全国に多く、明治一八年（一八八五）の『地名索引』では、八八もあげているとのことです。

昭和五四年刊『角川日本地名大辞典』東京都編には、牛ヶ淵、牛込、牛坂、牛島、牛田、牛鳴坂、牛沼、牛の尻、牛浜、牛町、牛丸郷などあげて、小字名となるとまだまだ現われます。

秋川市の牛沼について、『秋川市史』は、小川牧にちなむものか、ウシノマ（牛野馬）の転訛ではないか、との説もあるが、やや納得しがたい説だと、吉田茂樹氏の『地名の由来』にある、示唆にとんだ説を引用された。

国語学は「アサ（浅）し」と同根の語として、オソ（遅）・ウス（薄）・ウソ（薄）」まで教えてくれた。ところが地名を調べるともう一つ同根の語が浮かびあがってくる。「ウシ（牛）」

がそうではないかと思うのである。ここでは、あくまで「浅し」の「ウシ」であって動物の牛の語ではない。としている。「ウシは、浅（アサ）し」と同根の語ではないかというのである。「牛沼」は「浅い沼」のことであろう。地形から、かつては秋川畔に沼沢があって、水深も浅かったので、ウシヌマ（牛沼）とよばれていたのではないだろうか。と、説かれています（一二四七頁）。

菊池山哉氏は『東国の歴史と史跡』金井原合戦考の中「多麻の牛浜とは如何」の項で、次のように述べている。

牛浜なる村は正保図にはない。熊川村もない。あるのは福生村だけであるから、当時、この付近にあった村は福生村だけである。そこで熊川村の寺に福生院の名のある所以である。即ち熊川村は往時は下福生村であった。今の志茂と呼ばれる集落は、元は中福生と呼ばれたもので、それが下福生村が熊川村として独立したために、中福生を改めて下とし、上福生を改めて上とし、これに各々加美・志茂の二字をはめて、今日に至っているものである。青梅街道・五日市往還も、江戸開府後のものであると断定されております。

同じく前書の「牛浜の名義如何」の項では、

牛浜の名義についてはまだ解説を試みたもののあることを聞かない。この名義は元名でなく何かの訛りであることは一見してわかる。この付近が浜である道理はないからである。浜とは、水際なり、潮海に沿って平らかな所、海辺の広き所とある。多麻川の急流を、まさか河原でも浜とは言うまい。況んや牛浜は台地であると、説いて、牛場間（ウシバマ）ではなかろうか。牛場間とは牛込と同意義で、牧牛が多くいた、または、牛を野飼にしておった時代があったのでは、それかあらぬか、牛坂・馬坂が近くにあるという。

この辺は、承応年間玉川上水を引いてから、村ができ始めたものであるから、それまではいずれの村かの牛込であり、馬込であった時代がありはしないか。土地にその伝えはないが、牛や馬を野飼いにするには、もってこいの自然地勢であるから、牛込即ち牛場間が、牛浜なる名の生じた原因と考える。との、菊池説を紹介する次第ですが、事実、古老の方たちは明らかに〃ウシバマ〃なる呼び方を伝承しておるようです。

石浜から牛浜への転訛説でありますが、「ハジメにコトバあり」のごとく、一応うなずけられますが、元禄六年（一六九三）銘の、牛浜村鎮守稲荷の石祠には、あきらかに「丑浜稲荷」と彫られております。石が丑―牛と容易く変化するものなのでしょうか。

横新田という地名について

一説に、熊川牛浜を〃横新田〃とも呼ばれております。

これはさる年、多摩川の大洪水で、川縁りの熊川村の〝南地区〟の一部が流失して、移り住んで開発したことによるとの伝承があります。この時、千手院も現在地に移られたと伝えられています。このことは、熊川牛浜地区の人たちが、同寺を菩提寺としていることからも頷けられますが、これを証明する記録がありません。

塩野適斎は『桑都日記続編』に、作目村の流亡記録を次の様に記述しております。

○貞享二年（一六八五）乙丑の秋、作目村流亡す。「作目村は玉川の南岸千人町巳北に在り。二里にして近し。土貢七十三石。家数七十戸。壬癸の災に罹り、田園変じて石瀬と成る。流離の民、田中村と大神村との（昭和市）間に移る者十一戸。村山郷に移る者二戸。大神村に移る者二戸。拝島村に移る者七戸。日野本郷東光寺に移る者四戸。回田村（東村山市）に移る者三戸。其の他は之を知らず。爾来、村名は有れども村民はなし」とありますが、異説もあります。

『新編武蔵風土記稿』は、作目村の流失を、文禄・慶長の間、多摩川洪水の時とし、植田孟縉著『武蔵名勝図会』、『昭島市史』、高橋源一郎編『武蔵野歴史地理』菊池山哉の前掲書も、この説を採っています。

文禄五年十月改元して慶長元年（一五九六）となって八月の隅田川大洪水の折に、未曾有の大洪水が多摩川にも襲来し河心も変えたほどであったと。

正保の『武蔵田園簿』にも、「作目は皆川流」と注があり、一村田畑共押し流されたことを伝えております。

しかし、昭島市田中町の稲荷神社境内にある、水神宮（白山比咩神社）石祠の、両側面と背面に、作目村の水害記録と、安寧加護を願う「祝詞文三百十九字」が刻まれていることが、近年判明して報告（『多摩のあゆみ』第五七号）されました。これによれば、寛保二年（一七四二）八月朔日とある。『桑都日記続編』には、この日「大雨、大風、木を抜き、屋を発く」とあります。

この時に、「青柳（国立市）下府中用水口より、堤切れ、入水溢れ、谷保・本宿の田場一面に水押候時に、小野ノ宮（多摩市）の民家も皆水に浸り候」との有様で、青柳下の堤防が切れて、古玉川筋を押し流したという。

作目村流亡の記録も、右のように諸説錯綜しています。横新田の開発は、果して何時の頃のことでしょう。

伝承のみで、文献・史料は現在未発見で、聞くすべもなく、地区内にある〝千手院牛浜墓地〟に御座します、物言わぬ石仏、墓碑のかずかず、現在、貞享以前の、寛文九年（一六六九）や、延享元年（一七四四）銘等六基の墓碑が確認されました。

鎮守丑浜稲荷の石祠（元禄六年）のほか、元禄十二年（一六九九）、宝永二年（一七〇五）銘の庚申塔があり、

享保元年（一七一六）造立の〝牛浜地蔵尊〟が祀られておりますことなどから、横新田の成立は相当以前のことと思われます。

『福生町誌』昭和三五年刊は、『千手院過去帳』に、「正保元年（一六四四）二月九日　新田・七郎右衛門」というのがある。右の過去帳には、七郎右衛門と同様名前の上に新田と書いた人が何人かあった。もと南に居住していたので、代々の菩提寺に葬られたであろう。正保は近世初頭である。とすれば、それ以前の牛浜はおそらく、福生村・熊川村の堺に拡がる原野の地名としてのみ存在し、その所属は、福生村にも熊川村にも入った入会地的性格であったのであろう。

「いいかえれば、現在の福生町の地域に集落の発生がみられた当時、その地を領有した者が、福生郷の名でもって一括呼んでいたことを示すものと考える。以上の如く「小名」牛浜を解釈するとき、両村にまたがってある地名の問題も理解できるのである。」

牛浜開発伝承を裏書きしていることを記述しています。以上、諸説をとりあげて、読者各位よりの御叱正と、福生市史への、御提言、御指導を願う次第であります。

（たちかわ・あいお　市史編さん委員　志茂在住）

石浜渡津碑